

鐵  
產  
集

特260  
306

0m  
1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15

始



特260  
306



齋集





鐵彦集



鐵彦集

全きもの崩れそめたる心地して年たつけふの  
暮れて行くかな

みせ飾り一夜の中にあらためて去年の色なく  
なれる市哉

氷るし軒の算もおちそめて山の庵に春風ぞふ  
く  
ものみなのであらたまりても見ゆる哉心よりこ  
そ春はたつらし  
埴安の池のかどみにうつりけむおほみすがた  
をしのおけふかな

さやかにも見えしみゆきはとけそめて霞にね  
むる比良の遠山  
世をしらぬかたくな人に似たる哉梅さく野邊  
に残る白雪  
鴨川にととのふ春の色を見て比良の高嶺の雪  
はきゆらん

雲雀なくかげはいづことたどる眼にたまたま  
かゝる雪の遠山

年のうちに庭の梅が枝花さきぬかくては春や  
さびしかるらん

世にこびぬ田中の庵に冬ながら匂ふや梅のほ  
こりなるらん

なべて世の人の心をさそふには風まだ寒き春  
の野邊哉

ゆるぎなきものと聞つる富士のねもうきてぞ  
見ゆる今朝の霞に

老杉の雫にぬれて玉垣のしめれる苔に梅の花  
ちる

篁の竹をさながら折りまげてゆへる垣根に梅  
の花さく

鶯も今は春べと世にいでゝひとり谷間にかを  
る梅かな

いづかたの梅の梢も蕾にて春まだ浅し岡山の  
里

ひなまつりとりならべたる人形にうつり行く  
世のさまも見えつゝ

桃さくら見に来る人を青柳のまねきがほにも  
うちなびくかな

ふじの根の雪のこゝろもゆるぶらん裾野のど  
けき鶯の聲

あかぼしのかげを掬ひてくちそく岩井の上  
 にうぐひすのなく  
 おもふどち山遊びしてかへるさにうれしく得  
 たる初わらびかな  
 指ざしてをしへられても夕雲雀見さだめ難き  
 空になくなり

仰ぐ目にいたき朝日を背に負ひてかどやく花  
 の梢をぞ見る  
 こゝよりは舟をなやりそ春の川よどめる水に  
 花のうつれる  
 きしの上をめでつる花を舟にしてことなる花  
 とまためづる哉

うつれるは岸の上なる花なれどなほのぞかる  
る水のおもかな

若人の心も野邊にうちあぐる毬の行方に蝴蝶  
とぶなり

皆人のこゝろにあかぬ櫻花ちればちるとてま  
たながめつゝ

春もはや日傘なくてはあつしとてよくる木か  
げに花のちりくる

池のおもにうつれるかげもうちあひて底まで  
つづく藤浪の花

きのふかもちりて櫻のこえゆきしまがきに匂  
ふ山吹の花



吉野山花の林もことごとく若葉となりて春ふ  
けにけり

曙の色はうごけど青柳のたりたるかどはいま  
だとざせり

燈火のひかりは夢のごとくにて並樹のさくら  
花しらみ行く

心地よくぬるむ岩根に腰かけて折りしわらび  
のしなさだめする

霞たつ廣野の末にうちなびきねむるに似たり  
春のとほやま

人とはぬ片山里の夕ぐれは花さくころもさび  
しかりけり

草も木も光をはなつ心地してあしたのどけき  
春の野邊哉

松の木をむねとうゑたる我庵に春は隣の花の  
ちりくる

花ゆゑにおもひたつとはなけれども春は旅す  
るをりぞ多かる

花ちりてまだほどもなき若葉かげさすがに風  
は春風にして

産土の森の若葉を見にくればまだちり残る花  
もありけり

若葉さす都の大路まく水に夏の光も見えそめ  
にけり

仰ぐ目もまばゆくなりし大空の雲を若葉のか  
げよりぞ見る

若葉さす林の庵にこもる身は衣更さへよにお  
くれつゝ

鶯のかへるをまちて遅櫻谷の若葉のかげにさ  
くらん

神山のみどりをわたる朝風に小簾の葵もうち  
ゆらぎつゝ

市にいでゝたまたまなけどほととぎす聲きゝ  
わくる人ぞ稀なる

人傳てにきゝつる日よりこゝろしてまでと來  
なかぬ山ほととぎす

三つ五つ見ゆる火影を誰が里とはかる闇夜に  
ほととぎすなく

なくといひて友がほこりの水鶏の舍ゆきて今  
宵は我ぞたふかん

里川の水のよごみにかげおちてながれぬ月に  
水鶏なくなり

梅の實もざくろの花も五月雨のあめにはあき  
とおつるころ哉

鳴神のおときこゆなり五月雨のひさしき雨も  
晴れんとすらん

くりよする人もあらぬかうきぬなは浮きてた  
だよふ世の人ごころ

手をうてば緋鯉のむれもうきあがる池の水際  
に花あやめさく

ちりこみし花をめぐりにたゞへつゝ池の水際  
に杜若さく

五月雨の雨の晴間の朝風にあまき香たぐふく  
ちなしの花

五月雨に小川あふれて濁水あらふ垣根にくち  
なしのさく

日の色も青くもれ来て百尺の榎の木かげ風ぞ  
涼しき

あかるさにすぐる軒端にうれしきはみどりを  
たゞむ木かげなりけり

うかびたるくどひも青く見ゆる哉水際の若葉  
雨になびきて

白妙の衣の袖をいや白くてらして涼し夏の夜  
の月

ねられねばふたゝびおきてふくる夜の月の光  
にまたすどみけり

うち仰ぐ空の星より天つ風たもとすどしくお  
ろす夜は哉

燈火をまだきかゝげて涼舟うかべる川にかは  
ほりのとぶ

さしいでゝ青葉しげれる山川のかはづなく瀬  
に鮎のさばしる

川の瀬にすゞみがてらの獲物ぞと今朝しも友  
の鮎をおくれる

蟬もまだ露にねむりてしづかなるあかつきす

すし朝がほの花

曉のすゞしき露にうるはひてきよげにさける

朝顔の花

ふじのねの雪もきえ行く夏の日に雲の高嶺は  
眞白なりけり

梧桐の蔭のひるねの夢のまに日かげうつりて  
ひぐらしのなく

放れ牛遊ぶ堤の野うばらにあざみの花のまじ  
りてぞさく

飛びかひてとまらんとせぬ蝶見ればあざみの  
花の針やおそろふ

今日もまたひるの暑さやつよからんあさまだ  
きより蟬のなきたつ

瀧なして庭をすぎ行く夕立にのせうの花のか  
すあまたちる

打水の雫したる芭蕉葉のおくにすゞしき燈  
のかげ

砂白き磯の松原雨すぎてすゞしくたてる虹の  
色かな

さしいでゝねむの花さく片ぎしに涼しくかゝ  
る瀧の白糸



人は皆ひるねの夢の眞晝中ひとりねむらで牛  
のにれかむ

水をまく車のあとを蝶一つおひて行くなり夏  
の市中

短夜のたらぬがちなる眠りをばけふもひるね  
に補ひてけり

打むかふ鹽飽の島の夕立のなごりにさわぐ沙  
美の浦浪

さりかねし暑さを今宵うれしくも洗ひつくさ  
む雨のおとかな

秋風はあまねくふきて市中の家のうちまであ  
きつとびくる

築山の道をふさぎて石橋のたもとになびく秋  
萩の花

照る月の光の海の底にしてなびく玉藻と萩の  
みだるよ

曉のそごろありきの噺道おくつゆ草の花のす  
すしき

世の風のふきかよふともおもはれぬ山の奥に  
もこすもすの咲く

風わたる吉備の國原ゆふやけの光をあみて尾  
花なみよる

こすもすの花のひまより水のごと澄みたる秋  
の空を見る哉

空の色にさきすさびたる桔梗は秋の花野の眼  
なりけり

女郎花手折りかねけり鳴く蟲をおどろかさじ  
とおもふころに  
さびしさの夜にかはらぬ宿なればひるなほ蟲  
の聲の聞ゆる

さまぐに蟲の鳴音はかはれどもかなしきふ  
しは一つなりけり  
そびえたる銀杏の末に百舌鳥なきて朝霧ふか  
し里の小林  
さはるものなからん野邊をおもひつゝ庭の木  
の間の月を見る哉

立ちよらん木かげあらばとおもふまで大野く  
まなくてらす月かな

照る月の光の底に我庵は黒くちひさし田居な  
かにして

あまりにも月の光のあかければ松の林のひま  
よりぞ見る

てりわたる今宵の月に棹さしてきす方もなく  
うかれいでつゝ

心あひし友をとはんの道なれど月夜はあしも  
おくれがちなり

我ごとく月にねられぬ友ならんふけてかたら  
ふ聲のきこゆる

おもふどちうちかたらへどしぐれつくくるよ  
 夕はさびしかりけり  
 きりこむる秋の山もとゆふづゝの淋しきかけ  
 に鹿ぞなくなる  
 山里も道のひらけて年ごとにとほくなりゆく  
 鹿の聲かな

一本のいてふの大木あざやかに林を秋の色に  
 そめたる  
 學舎の銀杏のもみぢ子供等がちりことはやす  
 聲にちりつゝ  
 千町田の稲田のなみの渚とも見ゆるかきねに  
 菊の花さく

鳥おどす小田の案山子のすがたにもうつり行  
くよのさまを見る哉

釣糸を月にをさめてうらづたひかへる小舟に  
蘆の花ちる

村雨にぬれたる烏柿の實をついばむかげもさ  
びしかりけり

あきつとぶ野川の堤下り來れば水底あかし雲  
のうつりて

潮まつと人はねむれる釣舟の水棹の上に蜻蛉  
とまれり

山寺の秋の夕暮杖とめてきり立ちのぼる溪を  
見る哉

無花果も柘榴も赤く口あけて夕日にゑめる秋  
の園かな

紅葉狩道にまよひて友まてば秋風寒し森の下  
かげ

かりあぐる稻田のおもにうちむれて雀も秋は  
いそがしげなる

驛路の火影さびしく夜はふけてひどく汽笛に  
秋の聲あり

都より下關まで國々のもみぢを汽車のまどに  
見る哉

神無月亥の日をいつと老人はこよみよむなり  
日あたりにして

しぐれする醫師のはひりたそがれてくすりこ  
 ふ子のかげのさびしさ  
 時雨する夜はの淋しさ夜を守る犬も板戸によ  
 るけはひして  
 時雨する野中のわたし商人の一人わたりて日  
 は暮にけり

霜のおくあしたの庭に杖ながらたふれて匂ふ  
 白菊の花  
 夕日さす庭のうゑ木の赤き實にけふも來てな  
 くひえどりの聲  
 あかしやの並木はかれて學舎の窓に淋しきも  
 のゝ音ぞする



おのづからおつる木の葉は吹く風にみだるゝ  
 よりもかなしかりけり  
 たちよりてちるを惜みし人ならしかぶれる笠  
 に紅葉とまれり  
 夜を寒みさえに冴えつる月影やくだけてけさ  
 の霜となりけむ

野にふして夜をもりあかす武夫の衣に白しあ  
 かつきの霜  
 日はてれど狭山の池のあつ氷けふはひねもす  
 とくるけもなし  
 我妹子があらひし衣のしたゝりも氷柱となり  
 てたるゝ朝かな

荒磯の夕波千鳥吹く風にふきみだされてなき  
さわぐなり

めづらしき今朝の大雪曉のふりのさかりぞお  
もひやらるゝ

あやにくの今朝の雪よとおきいでゝつぶやく  
人もある世なりけり

朝日さす富士の高嶺の白雪は大和島根の光な  
りけり

世の中をはなれ小島にふる雪はかけはなれた  
る気色なりけり

かきわけて路のかたへにつむ雪の山の奥とも  
なれる市かな

さらでだに世にうもれ行く古寺の門をとざし  
てつもる雪哉

ふりかゝる雪は綿とも見ゆるなり柳は糸をこ  
れよりやくる

籠りてはえあらぬ君と此雪にまちつゝありき  
よくぞ來ませる

伯耆路の山をこえくる北風に吉備の國原雪ふ  
ぶくなり

うちわたす眞鐵路遠く霜見えて車どまりに月  
冴えわたる

風冴えて水音高き川の瀬にくだけて寒し冬の  
夜の月

小夜中と夜はふけぬらしかきおこす聞の埋火  
灰がちにして

夕やけのうつるも寒し蘆の葉のかれてむなし  
くなれる入江に

霜枯の蘆に風ふく湊江は涼みせし夜のおもか  
げもなし

我妹子が植ゑつる庭の藤ばかまかれたる色も  
なつかしき哉

月のかげ淡くのこりて霜きよきあしたの庭に  
水仙のさく

さなきだに寒さ身にしむ霜の夜の闇にきこゆ  
る野狐の聲

雪ふどく北の海原波あれて潮ぞはやき矢をい  
るがごと

濱松のみどりしなくば大八洲冬はさびしき島  
根ならまし

我里は春まだあさみ白雪の猶真白なる山も見  
えけり

桂花香りゆかしく匂ふにぞよその垣根ものぞ  
かれにける

さらにまたねられざりけり夜はのかねかぞへ  
つくせば時雨ふり来ぬ

あな寒しさむしといひて北窓のやれまつくろ  
ふ冬は来にけり

世の人に多く知られて何かせむころづかひ  
も多かるものを

降る雨を何かいとはんきぬぐのわかれには  
やくぬれしたもとは

ころろありて歌へる歌をくやしくもわがおも  
ふ人の知らすがほなる

木枯はいかにふくとも松が枝のおもひしをれ  
ぬ戀もするかな

とりいでゝ其すがたをを見るにだになほ人の  
目をしのぶころかな

今日もまたはぐや暦の一ひらの反古とすごし  
つあたら一日を

生木さへふけばふきさく風にして稚子が手に  
もつ車まはすも

曉の雨をきよつよおもふかなねむりすくなく  
なれる我身を

目のまへにきえゆく人をしのぶにも我身のか  
げぞかへり見らるよ

しめくと盲かたらく夜晝の光をせめてわか  
ち得べくば

川の瀬の世にとどろかむ名をさけて笈の水を  
しづかにぞさく

しらゆふをかけてさよぐる榊葉のさやけき色  
は神もめづらん

ほのくくと木間しらめどみあかしはまだ夜を  
のこす三輪の杉村

家といふ重荷のために山里の椎の木かげをは  
なれかねつる

馬方は積荷の上にひるねして野中の道を馬ひ  
とり行く

小鼠が生きんが爲めにすることも人より見れ  
ばにくき業にて

旅館ねられぬ夜はの鶏の音はさびしきもの  
うれしかりけり

むらがりてよりくる鳩に幼子は餌をやりなが  
らあとしざりする



こもりゐてひとり文よむ窓の外ををりく鳥  
 の飛びてすぎゆく  
 日かげさす岩間の淵を見下せば鯉一つありみ  
 じろぎもせで  
 教へてもたてには蟹のはよぬごと導き難き人  
 ぞ多かる

子ゆゑにはにぶりがちなる母親を心になきて  
 父はいさむる  
 しりぞきて田人たらんのやすきをば知らでや  
 人の名のみもとむる  
 何物も心にとめぬ心よりしひて山にはなづま  
 ざるらん

故郷を遠くはなれて外國の夕日のいろにもの  
 をこそおもへ  
 杖ふりて道の小草もうちて見ぬそゞろあるさ  
 のこゝろすさみに  
 おほけなく我身にうくる幸を今年も父の墓に  
 告げつる

高山を御空に仰ぐこゝろして神代の書ぞたふ  
 とかりける  
 小簾まける小窓の下のぬり机書よむやたれよ  
 む書や何  
 おもしろきいにしへ人の筆のあとをしくも紙  
 の数のつきたる

あたらしき世にあくがるよさまくのころ  
を壁の色に見るかな

我意はむしろとちてん新らしと世にいふ風は  
嵐なりけり

雪にふし風になびきてをりくに見のおもし  
ろき窓の呉竹

黄金もる袋の口のしめゆるべよにあやまたぬ  
人やいくたり  
世の中のすきも辛きも味ひてはてにぞこのむ  
苦き木の芽を  
はるばると空までつゞく海原のとほきみどり  
に白帆つらなる

朝夕のかまどの烟いでるまでなびく我家ぞい  
ぶせかりける

竹の杖藜の杖も杖なれど子こそまことの老の  
杖なれ

こぼるれば手もてひろひて幼子がおぼつか  
げの箸のはこびや

ことわりとあらまほしきときながらに缺とな  
りて身にせまるかな  
うつくしくかざりつらねて買ふ人の心をそ  
る市くらの棚

師の流れくむとはすれど古桶の底しなれば  
満たむ世ぞなき

大船のつどふ湊の満汐にかげをうつしてなら  
ぶ濱庫

とほき國へあるじは行きてこぼれたる屋敷の  
あとに瓦ちりばふ

花の色も月の光も書工は小皿の上に先づうつ  
しつゝ

うちわたす碇ぞひろき舟にしてわたるは水脈  
の一筋にして

ことさらにふみたわめつゝわらはべの渡るが  
あやふ門の板橋

燈火のひるとかどやく市中にむかしの城のく  
らくそびゆる

薪負ふおきなに先をゆづりけりならびて行け  
ぬ山の細徑

いかなれば國と國との境にはいつもあやしき  
雲のたゞよふ

さしよめす指をたどれば沖遠き釣舟一つ目路  
にいりくる

豆太鼓とりてはなきぬ幼子の力にまけぬ親や  
なからん

情てふ焰の中にもえざらば世の交りはつめた  
からまし

うたがはであらばこそあれうたがへば明日の  
我身もいかゞあるべき

鴛一つ大空高く舞ふありて庭の芝生は晝静か  
なり

目の見えてかへりて物におどろくと癒えしめ  
しひの我に訴ふる

戦へと男子一人があぐる手にうたてあまたの  
人のほろぶる

とり得たる國も寶もすてつべしますらたけを  
の血をいかにせん

やからみな憂に沈む枕邊にひとりくすしの顔  
のかゞやく

行く友のあとをてらして見送れば闇の夜道に  
かげのきえゆく

五代まで直くつかへて吳竹のよの長人と歌は  
れし君

世の中はおもひのまゝになりひさご雲井をか  
けてのびし蔓かな

高松の城にそゞぎし川水はもろこしまでもあ  
ふれゆきつゝ

櫻さく國の姿を朝づく日さやかに君ぞときあ  
かしつる

今もなほ御許をさらすさもらひてみことかし  
こみ仕へますらん

假官の御階の下にたゞすみて田鶴も其日を忍  
びがほなる



うちむれてかなしき雁も來る時に一人わかれ  
てかへる君かな

獅子の子はしるやしらすや谷底にけるもおと  
すも親の情ぞ

○  
安からぬうき世の旅に年をへてつかれ覺ゆる  
身となりにけり

### 臺灣雜詠

故郷にかへりつきたる心地して臺北の子の家  
にわれぬる

常夏の島ときよしを來て見れば吹く風さむし  
霜月の朝

船はてし基隆の港小雨ふり旅のこころの先づ  
ぬるゝかな

子の心なぐどおもへば波荒らき海路を越えし  
かひはありけり

秋ながらみどり色こき臺北の並木をてらす月  
のさやけさ

淡水の堤に立ちて臺灣の秋めづらしく國見す  
るかな

岸くえて水にひたれる思想樹の枝にあひるの  
あまたとまれり

臺北の古亭の川を秋とひて心をさなく石なげ  
て見つ

竹藪にとりかこまれし一くるわ赤き煉瓦の低  
き家根見ゆ

支那の海の波間はるかに沈み行く夕日のかげ  
をひとりながむる

支那の海に日はうすづきて臺灣の椰子の林に  
夕やけのする

故郷の人はいかにと臺北の日夕のかげにも  
おもふかな

友の文うれしとよみし其夜しも夢に見えけり  
故郷の山

我世ぞと木かげに眠る水牛の背に小鳥のとま  
りたるかな

此の庭の松の一本此の松の此の一本ぞ故郷の  
色

もる月もくらき榕樹の並木かげ按摩の笛のふ  
けてさびしき

枯蘆の花ふきちらす秋風にむしろ帆あげて舟  
の行く見ゆ

旅なれば島の秋風身にぞしむはだへさむくは  
ふかぬものから

親なれば子なればこそあれ山を越え海をわた  
りて遠く來にけり

すこし春めいた二月の半ば過ぎ、ひる近い頃久しぶりに藤原君が我が二  
艸園を訪はれた。藪の鶯はしきりに珍客をもてなし顔に鳴いてゐた。  
君は今年古稀であるから、歌友に小さい折本一冊に二十首づゝ歌を書い  
て贈りたいと思ふ。幸年頃詠んだ草稿も出て来たから、其を寫して持参  
した。此の内から二百首ばかり撰り出してほしいと云はれた。君は私  
と同じく始め歌を松浦辰男先生に學ばれ今は南天莊先生に就いて修業  
してゐられて、私とは極めて親しい間柄であるから、君の手だすけをする  
位の氣で君の依頼を引き受けた。撰り出すと云つた處で兩先生の點も  
付いてゐる事であるし、其を斟酌してどん／＼印を付けていつて、日なら  
ずして君に返した。時代の變遷もあり、作者の進歩もあるから自然舊い  
歌は數が少くなつた。私は四季の關係を考慮せなかつたから、君が實際  
折本に書くには都合のわいる點が出来たので幾分増減せられて、其から

丹念に書かれて歌友に配ばられた。私も一冊をめぐまれた。或日、君から歌帖を贈られた友人二三が會した折の談に、一冊づゝ貰つたのでは頒たれた歌の全體が知れない。其を持ち寄つて一會を催し、其歌を集録して一書を作り印刷に付して後日の紀念としては如何と云ふ問題が出た。しかし持ち寄つて雅會を催すと云ふ事は時節柄遠慮して、藤原君の原稿を借りて寫して出版する事にしてはと云ふ事に協議が一決して、全部の仕事が私に任かされた。私が藤原君と交渉して原稿を借り出して、あと萬事獨斷で出來たのが此本である。百部を印刷した。後世をまたずして珍本である。鐵彦、藤原鐵太郎が現代縣下屈指の歌よみである事は云ふ必要もないが、由來我が縣下は歌集の出版せられたものが極めて稀であつて心細い。君の家集はゆく／＼出來る事で有らうが、今先づ其片鱗を窺ひ得る集が出來た事をよろこぶ。

昭和十三年八月念五日早朝

正宗敦夫

因に君が歌帖を惠まれた人々は

藤田荒次郎	中塚正齊	田中熊次郎	柚木梶雄
大野友松	別府雅子	井坂爲則	水河序平
赤澤乾一	掛谷令三	大塚義男	吉澤周一
黒住靜太	淺羽春之	廣田謙吉	冨田清子
和栗榮子	齋藤精一郎	小倉知秀	廣瀬侍郎
正宗敦夫			

である。紀念に是をも追記しておく。

386  
571

昭和十三年十月五日印刷  
昭和十三年十月十日發行  
（非賣品）  
著者 藤原鐵太郎  
發行所 岡山縣和氣郡伊里村藤原  
岡山市東田町八四番地  
印刷所 岡山縣和氣郡伊里村藤原  
岡山市東田町二二三ノ一  
發行所 正宗教夫  
岡山縣和氣郡伊里村藤原

昭和十三年十月五日印刷  
昭和十三年十月十日發行  
（非賣品）  
著者 藤原鐵太郎  
發行所 岡山縣和氣郡伊里村藤原  
岡山市東田町八四番地  
印刷所 岡山縣和氣郡伊里村藤原  
岡山市東田町二二三ノ一  
發行所 正宗教夫  
岡山縣和氣郡伊里村藤原

終

